

NPO 法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
研究紀要

niwa 瀬波



2017
第4号

【表紙写真】

夜明け前。朝焼けにシルエットが川面に浮かび上がる
白山平山(左)と犬山城(右)。



犬山の春の風景、犬山祭。
平成28年にユネスコ無形文化遺産に登録されました。



臨済宗妙心寺派の古拙、
青龍山瑞泉寺。犬山城下にて
当山雲水らの托鉢の風景。

【写真：中野耕司】

NPO 法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
研究紀要 第4号

niwa 瀬波

目次

平成 28 年度活動記録

木之下城伝承館堀部邸	2
青塚古墳史跡公園	3
ニワ里ねっと自主事業	4
文化遺産関連受託事業	5
活動年表	6

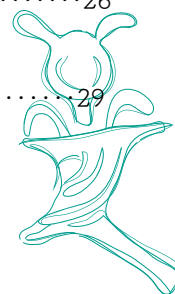
研究論考

古代「瀬波」の領域とその基層文化について 赤塚次郎	8
蓮池・西山古墳群周辺の新規発見古墳について — 瀬波の遺跡踏査成果その3 — 服部哲也・近藤健一	13
犬山焼における押印と銘 ～三代尾関作十郎信敬の印～ 井上あゆこ	18
犬山焼に登場する動物たち — 龍と獅子を中心に — 佐久間 真子	22

資料紹介

蓮池古墳群出土とされる須恵器について 大塚友恵	26
----------------------------------	----

会員募集	29
------------	----





平成 28 年度

活動記録

文化遺産のみえるまちづくり

NPO法人ニワ里ねっとの設立から早いもので、丸7年。「文化遺産のみえるまちづくり」をコンセプトに、多岐にわたる活動を行ってまいりました。

今年度はニワ里企画のイベントを充実。バスツアーや、復興応援ツアーなどで各地の文化遺産に接する機会も増えました。そうした中で、過去を伝える文化遺産を、今・未来にどう活かしていくかを改めて考えさせられる一年となりました。



5



1

木之下城伝承館・堀部邸

第2期目となる本年度は、地域を題材にした企画展を春・秋に開催。素晴らしい写真の数々が邸内に並びました。「猪之子座」では、堀部邸の雰囲気を活かし、落語や講談、語りなどを公演し、多くの方々に楽しんでいただきました。心地よく過ごせる空間を作るため、建物や庭の手入れを日々行っており、特に黒壁は伝統的な柿渋塗りによって、美しい姿が蘇りました。

- 1. 黒壁の柿渋塗り
- 2 3 4. 猪之子座
- 5. 秋の企画展
- 6. 堀部邸の冬至梅
- 7. 障子張替え
- 8 9. 日常風景



7



6



3



2



8



9



4



5



2



1

青塚古墳史跡公園

青塚古墳まつりや草刈ボランティアなど、地域の方と青塚古墳を「地域の宝」として守り、活かしていく活動を進めてきました。10月の瀬波史楽座では、壺はにわ列が復元された古墳の前で素晴らしい音楽と古代劇を上演、幻想的な景色を堪能しました。四季折々の景色を楽しむ史跡公園として、地域の方々はじめ多くの方に訪れていただいています。

1. 青塚古墳まつり
2. 青塚星空観察会
4. 5. 瀬波史楽座 古代音楽絵巻第2章
6. 青塚古墳を守る会
7. 日常風景
8. 青塚古墳で防災訓練
9. ニワ里カレッジ



6



3



8



7



9



4



5



1

ニワ里ねっとと自主事業

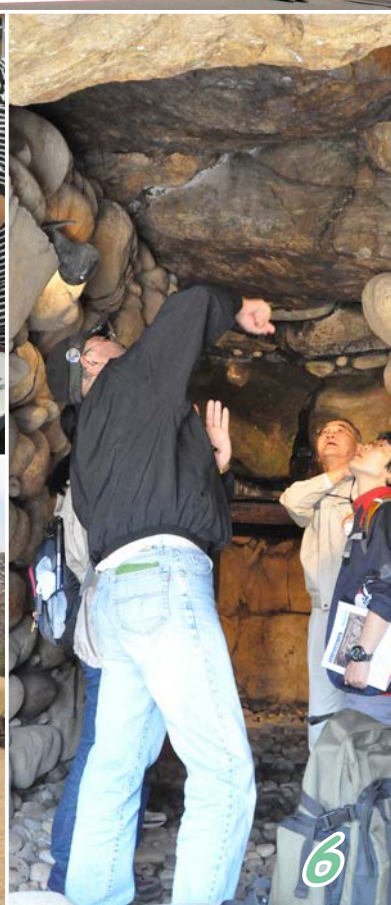
文化遺産をめぐるバスツアー、今年は見里市・飯田市・富加町へ。それぞれその地の専門家の方に熱弁いただき、どれも充実したツアーでした。また「復興応援ツアー」として、三陸沿岸と熊本へも行きました。

犬山市内の活動では、石上げ祭にニワ里連として初参加。継続して行っている栗栖プロジェクトでは、小学校での授業に加え、これまでの分布調査の報告会を催しました。

1. 三陸復興ツアー 浄土ヶ浜にて
2. 3. バスツアー 飯田 塚原三子塚・博物館
5. バスツアー 富加 井高1号墳
6. バスツアー 可児 川合次郎兵衛塚古墳
7. 栗栖プロジェクト 土器作り
8. 熊本復興応援ツアー オブサン古墳
9. ニワ里ウォーク 志段味古墳群



7



6



3



2



8



4



9



5



4



1



6



7

文化遺産関連受託事業

西尾市での詳細分布調査の4年目、旧西尾市域を対象に行いました。

西尾市・養老町・犬山市などで文化遺産関連のシンポジウムや講演会・ワークショップを開催、どちらも大勢の方にお越しいただきました。

尾張旭市・養老町では企画展示の補助作業を行っています。

福井県美浜町で新たに文化遺産カードが増え、現在152枚となりました。

1. 西尾市詳細分布調査風景
2. 西尾市史跡散策
3. 歴史座of大山街プロジェクト
4. 歴史座in西尾
5. 東之宮古墳普及啓発事業
6. 養老町歴史文化資源普及事業
7. 尾張旭考古企画展
8. 栗笠の郷土芸能展示支援業務



2



9



8



3

①市澤英利（飯田市上郷考古博物館） ②7:00-19:00
③飯田市周辺 ④29名

12・13日：【養老町】「作って舞おう！栗笠の獅子舞展」
展示補助 ②10:00-15:00 ③養老公園 ④500名

13日：【犬山市】「第18回あつまれいぬやまっこ！うきうき大行進」東之宮古墳消しゴム・ペーパークラフトワークショップ ②10:00-15:00 ③南部公民館 ④79名

18日：【犬山市】いぬやま地域学芸員養成塾「栗栖周辺の遺跡について」 ①瀬瀬茂（ニワ里ねっと）
②10:00-11:30 ③青塚古墳 ④5名

19日：【養老町】養老改元1300年古代歴史講演会「壬申の乱から元正天皇行幸へー養老改元の背景を探るー」
①早川万年（岐阜大学）ほか ②14:10-16:15 ③養老町民会館 ④500名

20日：古墳よ jazz を聴け！ ③青塚古墳 ④26名

26日：みやげ話の会 ①古川博昭（ニワ里ねっと）ほか
②10:00-11:30 ③青塚古墳 ④13名

28-30日：「ニワ里ねっと三陸応援ツアー」 ③岩手県宮古市ほか ④13名

12月

2日：【犬山市】いぬやま地域学芸員養成塾「栗栖地区を歩く」 ②10:00-11:30 ③栗栖地区内 ④5名

6日-2月5日：企画展「楽田、埋もれた未知の歴史」
③青塚古墳

8日：【犬山市】いぬやま地域学芸員養成塾「小牧長久手の戦いと犬山」 ①市澤泰峰（名古屋城管理事務所）
②10:00-11:30 ③青塚古墳 ④12名

10日：ニワ里カレッジ「昼飯大塚古墳と西美濃の古墳」
①中井正幸（大垣市教育委員会） ②10:00-11:30 ③青塚古墳 ④36名

10日：【大口町】「上方講談で聴く！！」堀尾の殿様」
①講談師：旭堂南海 ②14:00-16:00 ③大口町健康文化センター ④100名

11日：【犬山市】「東之宮古墳観光散策マップ作成ワークショップ」 ②10:00-12:00 ③東之宮古墳周辺 ④18名

15日：【犬山市】いぬやま地域学芸員養成塾「羽黒周辺を歩く」 ①市澤泰峰（名古屋城管理事務所）
②10:00-12:00 ③羽黒周辺 ④12名

17日：まほら講座第1回「蓮池古墳群について」 ①服部哲也（ニワ里ねっと） ②10:00-11:30 ③青塚古墳 ④50名

24日：古墳よ jazz を聴け！ ③青塚古墳 ④48名

25日：【春日井市】「楽しく学ぶ！古墳学習塾」
②9:30-12:15 ③春日井市立中央公民館 ④41名

1月

8日：古墳よ jazz を聴け！ ③青塚古墳 ④17名

12日：【犬山市】いぬやま地域学芸員養成塾「栗栖地区発表会」 ②10:00-11:30 ③青塚古墳 ④6名

19日：【犬山市】いぬやま地域学芸員養成塾「羽黒地区発表会」 ②10:00-11:30 ③青塚古墳 ④11名

20-22日：【養老町】養老町文化財ミニ展示「西脇家文書展」
展示補助 ③養老町民会館 ④116名

28日：まほら講座第3回「楽田城を見学しよう」 ①大塚友恵（ニワ里ねっと） ②10:00-11:30 ③楽田周辺 ④39名

29日：みやげ話の会 ①田口韶・葉栗克彦ほか（ニワ里ねっと） ②10:00-11:30 ③青塚古墳 ④11名

29日：企画展展示解説 ②11:30-12:00 ③青塚古墳 ④11名

2月

3日：ニワ里バスツアー「岐阜県富加町・夕田茶臼山古墳と加茂の文化遺産を訪ねる」 ①島田崇正（富加町教育委員会） ③富加町周辺 ④18名

4日：まほら講座第4回「犬山の戦争遺跡について」

①伊藤厚史（名古屋市教育委員会） ②10:00-11:30 ③青塚古墳 ④43名

10日：柿渋塗り（黒壁修復ワークショップ） ②10:00- ③堀部邸 ④5名

19日：【西尾市】西尾市史跡散策・西尾西野地区 ②10:00-13:00 ③西尾市西野地区 ④14名

19日：【養老町】子ども歴史ワークショップ「きのこをつくろう！」 ①津田格（岐阜県立森林文化アカデミー）
②9:00-11:45 ③ふれあいセンター養老 ④30名

26日：まほら講座第2回「犬山の古代寺院」 ①梶原義実（名古屋大学） ②10:00-11:30 ③青塚古墳 ④46名

27日：【尾張旭市】尾張旭考古企画展「再び卓ヶ洞に窯を築くー断続する尾張旭の須恵器生産ー」 展示補助
③スカイワードあさひ

3月

5日：【西尾市】歴史座 in 西尾「羽角山古墳群と久麻久の里」

①西松賢一郎（ニワ里ねっと）ほか ②13:00- ③西尾市岩瀬文庫 ④65名

11日：青塚古墳で防災訓練 ①防災講演会：嘉見俊宏（みよし市教育委員会）ほか ②9:00-11:30 ③青塚古墳 ④45名

12日：古墳よ jazz を聴け！ ③青塚古墳 ④62名

12日：堀部邸特別公開 ③堀部邸

13-14日：復興応援ツアー第2弾「西南戦争激戦の地田原坂と火の国の古墳見学」 ③熊本県内 ④9名

18日：堀部邸第3期公開開始

18日：みやげ話の会 ①麻野純子・服部哲也（ニワ里ねっと） ②10:00-11:30 ③青塚古墳 ④13名

25日：【富加町】「歴史とあそぼう」夕田茶臼山古墳消しゴムワークショップ ②10:00-17:00 ③タウンホールとみか

26日：栗栖プロジェクト報告会「ぼく・わたしが見つけた栗栖の歴史」 ②10:00-11:30 ③犬山市福祉会館 ④50名

***【犬山市】青塚古墳史跡公園活用管理業務**
年間入館者数 11,877名

***【犬山市】旧堀部家住宅利活用事業**
第2期公開（3月中～12月中）4962名

***【西尾市】西尾市遺跡詳細分布調査**

***【美浜町・西尾市・養老町・大垣市ほか】文化遺産カード製作業務** カード数 152種類（H29.5現在）

開催日：【委託市町村】事業名

①講師（敬称略） ②時間 ③場所 ④参加者数

緑色：堀部邸での事業

桃色：青塚古墳での事業

黄緑色：その他ニワ里ねっと自主事業

水色：文化遺産関連受託事業

2016

4月

9日：【犬山市】土あげ祭り ②9:30- ③東之宮古墳 ④15名

10日：ニワ里カレッジ「バスツアー事前勉強会」
②10:00-12:00 ③青塚古墳 ④25名

15日：ニワ里バスツアー「可児の古墳めぐりバスツアー」
①長瀬治義（可児市教育委員会）③可児市周辺 ④22名

24日：街道・祭礼ウォーク「一宮・石刀神社の祭礼 石刀祭を訪ねる」 ①久保禎子 ②12:00- ③一宮市今伊勢周辺 ④13名

5月

14日：青塚古墳まつり ②10:00-13:00 ③青塚古墳 ④1052名

21日：ニワ里総会 ②10:00-12:00 ③堀部邸 ④39名

22日：古墳よ jazz を聴け！ ③青塚古墳 ④87名

28日：みやげ話の会 ①岡本利雄・服部哲也（ニワ里ねっと） ②10:00-12:00 ③青塚古墳 ④11名

6月

4日：青塚古墳を守る会 ②7:30-9:00 ③青塚古墳 ④45名

11日：ニワ里カレッジ「宗女台与の墓は何処にある」
①赤塚次郎（ニワ里ねっと） ②10:00-11:30 ③青塚古墳 ④32名

12日：ニワ里ウォーキング「歴史の里しみ古墳群を歩く」
①服部哲也（ニワ里ねっと） ③名古屋市 ④8名

15日-26日：木之下城とその城下町物語 2016「犬山街・はじまりの地」写真展 ①写真：中野耕司 ③堀部邸

26日：猪之子座「木之下城物語」 ①語り：広瀬まり、解説：赤塚次郎 ②14:00-15:30 ③堀部邸 ④33名

7月

3日：古墳よ jazz を聴け！ ③青塚古墳 ④35名

16日：「石上げ祭りに参加しよう！」 ①奥村正成（石上げ祭伝承保存会会長）・山田健（尾張富士大宮浅間神社宮司） ②13:30-15:00 ③青塚古墳 ④8名

27日：青塚こども教室「青塚の藍で、藍染体験」
②10:00-12:00 ③青塚古墳 ④25名

30日：青塚こども教室「青塚星空観察会」 ②19:00- ③青塚古墳 ④43名

31日：みやげ話の会 ①在野一生（ニワ里ねっと）ほか ②10:00-12:00 ③青塚古墳 ④23名

8月

3日：青塚こども教室「青塚古墳のオリジナル模型をつくろう！」 ②10:00-11:30 ③青塚古墳 ④23名

6日：【養老町】「養老石で火をおこそう」 ①水野裕之（名古屋市教育委員会） ②9:30-11:30 ③ふれあいセンター養老 ④28名

7日：「石上げ祭りに参加しよう！」 ②7:30- ③尾張富士浅間神社 ④15名

21日：青塚こども教室「青塚古墳 壺はにわ再現プロジェクト！」 ②13:00-15:00 ③青塚古墳 ④10名

27日：ニワ里カレッジ「象鼻山古墳群と日吉遺跡の謎」
①中島和哉（養老町教育委員会） ②10:00-11:30 ③青塚古墳 ④34名

30日：栗栖プロジェクト「縄文時代生活体験ワークショップ・縄文土器作り」 ②9:45-11:40 ③栗栖小学校 ④19名

9月

4日：古墳よ jazz を聴け！ ③青塚古墳 ④88名

10日：青塚古墳を守る会 ②7:30-9:30 ③青塚古墳 ④46名

11日：【犬山市】東之宮古墳「葦石ワークショップ」 ②9:00-11:30 ③東之宮古墳周辺 ④22名

17日：猪之子座「上方落語九雀亭」 ①落語家：桂九雀 ②14:00- ③堀部邸 ④33名

19日：みやげ話の会 ①吉田さよ子（ニワ里ねっと） ②10:00-11:30 ③青塚古墳 ④15名

22日：【犬山市】「(仮称) 東之宮古墳土上げ祭ワークショップ」 ②9:00-11:30 ③東之宮古墳周辺 ④20名

24日：ニワ里カレッジ「邪馬台国・纏向遺跡を語る」
①寺沢薫（桜井市纏向学研究センター所長） ②13:30-15:30 ③青塚古墳 ④42名

10月

1日：街道・祭礼ウォーキング「獅子舞う、養老町栗笠・福地神社祭礼を訪ねる」 ①廣瀬正嗣（養老町教育委員会） ②14:45- ③養老町栗笠周辺 ④7名

6日：【犬山市】いぬやま地域学芸員養成塾「木之下城と犬山の町のはじまり」 ①赤塚次郎（ニワ里ねっと） ②10:00-11:30 ③堀部邸 ④8名

8日-：【尾張旭市】尾張旭民具企画展「秋まつりの食卓一箱ずしのある風景」展示補助 ③スカイワードあさひ

13日：栗栖プロジェクト「分布調査体験・尾崎遺跡の学習」
②9:45-11:40 ③栗栖小学校 ④19名

15日：ニワ里カレッジ「古代の長弓・戦いのお話」
①岡安光彦 ②10:00-11:30 ③青塚古墳 ④25名

16日：第10回瀬波史楽座「古代音楽絵巻 第2章 赤い壺の物語」 ①出演：包金鐘ほか ②17:00-19:00 ③青塚古墳 ④282名

20日：【犬山市】いぬやま地域学芸員養成塾「木之下城とその城下町をめぐる」 ①赤塚次郎（ニワ里ねっと） ②10:00-11:30 ③堀部邸 ④6名

22日：【犬山市】「東之宮古墳管理・活用ワークショップ」
②10:00-11:30 ③堀部邸 ④11名

22日：猪之子座 no.7「やまんば物語2」 ①語り：広瀬まり 解説：赤塚次郎（ニワ里ねっと） ②14:00- ③堀部邸 ④19名

23日：【犬山市】「東之宮古墳観光散策マップ作成ワークショップ」 ②9:00-11:30 ③東之宮古墳周辺 ④13名

27日：【犬山市】いぬやま地域学芸員養成塾「入鹿池史」
①小嶋毅（犬山歴史研究会） ②10:00-11:30 ③青塚古墳 ④5名

29日：猪之子座 no.8「旭堂南海の上方講談をたっぷり2」
①講談師：旭堂南海 ②14:00- ③堀部邸 ④28名

11月

3日：【犬山市】「東之宮古墳観光散策マップ作成ワークショップ」 ②9:00-11:30 ③東之宮古墳周辺 ④12名

5日：【犬山市】歴史座 of 犬山街プロジェクト「幻の栗栖 アンモナイトの謎」 ①糸魚川淳二（名古屋大学）ほか ②13:00-16:00 ③犬山国際観光センターフロイデ ④120名

6日：【犬山市】「東之宮古墳観光散策マップ作成ワークショップ」 ②10:00-11:30 ③堀部邸 ④7名

10日：【犬山市】いぬやま地域学芸員養成塾「入鹿池周辺の旧知をめぐる」 ①小嶋毅（犬山歴史研究会） ②10:00-11:30 ③入鹿池周辺 ④14名

12日：ニワ里バスツアー「伊那谷・飯田の古墳を訪ねる」

古代「邇波」の領域とその基層文化について

NPO法人 古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
赤塚 次郎

1. 邇波の地相

邇波という場面は犬山扇状地にある。それはまさに母なる河、木曾の流れが山間から流れ落ちる、現在の犬山市域からはじまる。そして広大な濃尾平野沖積低地と出会うまでの間の領域を指す。河の流れは犬山扇状地を毛細血管のごとく多くの支流となつて縦横無尽に流れ落ち、ゴロゴロとした濃飛流紋岩やチャート・砂岩などを主体とする丸石の世界であつた。木曾三川が流れる濃尾平野の沖積平地部は、扇状地、自然堤防卓越地域、干拓三角州地域に大別されている。北部は揖斐・長良・木曾の三河川によって形成された扇状地で、そのうちで最大規模のものは木曾川による犬山扇状地である。現在の犬山城付近を扇頂に半径約12kmに及ぶ広大な扇状地を形成している。揖斐川の扇状地は半径約10km長

良川は約6kmで、これら扇状地の扇端には、一宮市、岐阜市、大垣市などの都市がそれぞれ発展した。

さて、木曾川の流れは、犬山扇状地ではほぼ一本化されているが、この現風景は江戸時代にはじまる。すなわち尾張徳川家による御囲堤プロジェクトが犬山扇状地の景観を一変させた。その起因は軍事上の視点と何度も襲いかかる「洪水」災害と考えられてきた。特に1596年(慶長元年)尾濃洪水、百年以来ノ大水の記録。また1607年(慶長12年)三河・尾張・美濃洪水の記録などがお囲堤築造起因とされるが、堤築造には諸説ある。通説的には概ね慶長年間ごろには築堤が完成したとされている。17世紀初頭の出来事であるが、その後も1629年(寛永6年)や1650年(慶安3年)など幾たびかの洪水が起こっている。この

ような洪水イベントは犬山市域では怪異「やろか水」の伝承、扶桑町には「山那切れ」や「光明寺流れ」などの伝承が伝わり、地域の災害の歴史を今に伝えている。

水を集めることにより異なる次元の災害が始まろうとしていた。また同時に水源を絶つてしまった事により、扇状地では水不足が深刻化し、新たに「用水」の整備が必要となつていく。このジレンマは現在まで尾を引いている。いずれにしても、犬山扇状地ではかつての木曾川の分流が放射状に発達し、扇状地面に2~3mの深さをもつ開析谷を形成し、その景観は現在でも扶桑町・大口町から江南市にかけて明確に確認することができる。かつての水の流れの痕跡でもあるが、近代の開発は、この開析谷に道路を造り、住宅地を広げ、また線路を設定し駅を造つた。ところで邇波の地は保水力が弱く、加えて表層に堆積するクロボク層は小粒の砂利が混在し水田耕作にはあまり適した土壌ではなかった。少し前までの犬山線の車窓からは、一面に広がる桑畑が広がる風景であつたし、現在でも畑地が広がり水

田地帯という印象はない。したがって古代においても水田耕作を基本とする集落景観を推測することはできず、継続性のある拠点的な大型弥生「集落遺跡」もほとんど存在しない。さらに古墳時代には、三世紀中頃以降は散村形態が主体となり、邇波の世界においても小規模な集落の拡散が認められる程度である。継続的かつ大規模集約的な集落景観は、後述するように二、三箇所の特定地区以外を除いて、古代邇波の世界には見いだしたい。

ところで犬山扇状地の西・東側には扇状地を囲むように段丘堆積層が発達している。おそらくそこには、かつて巨木が生い茂る「大樹海」が存在した。また一方で低地部となる犬山扇状地では、木曾川が分流した小河川を基軸とし、湧き出る「泉」を加えて複雑に展開する微高地と開析谷が織りなす風景が広がっていたと想定したい。

2. 邇波の領域と「沼(ツヌ)」「郷

さて、古代の尾張國邇波(丹羽)郡、その領域は基本的にはほとんど大きな動きは認められず、概ね犬山

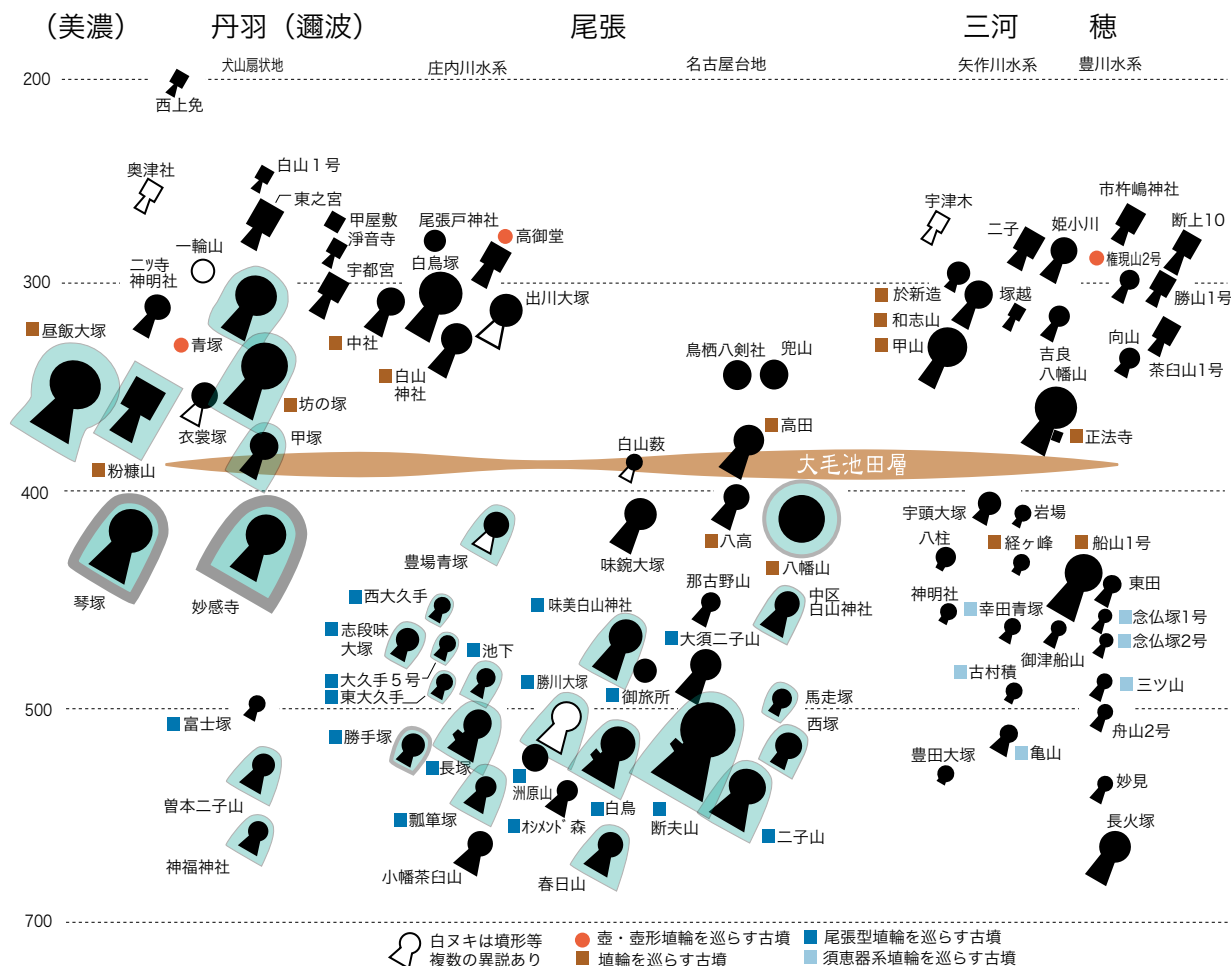


図1 愛知県的主要古墳編年

扇状地そのものを意味するものと理解したい。そして文献上では丹羽郡とは「邇波県」（旧事本紀・続日本後紀）の存在と密接に関係し、その領域がすなわち丹羽郡として設定されたものと推定されている。「和名抄」には丹羽郡に12の郷が存在したことが記載されているが、その個々の具体的な場所については諸説が存在する。その内でおおむね衆目の一致を見ている郷域としては以下の郷などがある。一宮市丹陽町を含む一帯の「吾鬘郷」、一宮市丹羽を含む「丹羽郷」、一宮市千秋町から江南市南端にかけての「穂積郷」、丹羽郡扶桑町から江南市北東部にかけての「前刀郷」、犬山市羽黒を中心とした「小弓郷」、丹羽郡大口町から江南市にかけての「小口郷」が推定されてきた。その他、小野郷・上沼郷・下沼郷・大桑郷・上春郷・稲木郷の記述が見られる。

ところで諸説ある上沼郷・下沼郷であるが、特に「沼」郷（その後に上沼・下沼に分割）を、木曾本流が扇状地と出会い分流する犬山北部域を中心とした湿地帯、河道域と想定しておいた（赤塚2014）。その

「沼」の領域とその景観をここでは、改めて次のように推定しておくたい。まず木曾本流とその分流する河川が錯綜する場面、現在の伊木山周辺から木曾の流れが大きく分流しはじめる事は、地形に刻まれた微高地と開析谷から容易に推測できる。したがってこうした「河の分流地点」をまず第一の「沼」郷の特徴と考える。次に犬山市・各務原市にかけて広がる段丘堆積層が存在する。こうした発達した段丘崖地帯を第2の特徴と位置づけ、段丘堆積層から滲み出る豊かな「泉」を基本として小河川・沼が展開する風景をも想定しておきたい。そしてさらに段丘堆積層上にも「沼」が構成される。特に犬山市東部に広がる丘陵地から流れ落ちる水、その流れが段丘堆積層上で行き場がなくなり、水が澱む地域に湿地帯が広がっていた。現在の犬山城下町東部に広がる水田地帯がまさにその場面である。東部丘陵から流れ落ちてきた善師野川・天神川・半ノ木川などが現在の橋爪地域で広い湿地帯を作り上げていたのである。その水はやがて羽黒地区に向かって集まっていき、「小口郷」で扇状地



に流れ落ちることになる（赤塚 2017）。このような段丘堆積層上の「沼」景観が「沼」郷の第3の風景でもある。なお「沼」郷の呼称であるが、「ツヌ」と呼ばれていたようである（『愛知県の地名』）。

3・遺跡と古墳分布

犬山扇状地、すなわち瀬波の領域には多くの前方後円（方）墳が築造された。大きく捉え直すと、現在の木曾川本流域と五条川水系の2箇所にまとまり傾向が見られる。まず木曾本流域域としては、ここで推定した「沼」郷にあたる場面でもある。犬山市域の東之宮古墳・甲塚古墳・妙感寺古墳、加えて対岸の鵜沼古墳群では一輪塚山古墳・衣裳塚古墳、坊の塚古墳などが存在し、約2 km圏内に大型古墳が集中する特徴的な地域として存在する。まさに「沼」に割拠した王とその仲間たちが住まう場所として位置づけられよう。一方で五条川水系では、大口町の小口白山1号墳・犬山市青塚古墳、江南市小折周辺には富士塚古墳・神福神社古墳・曾本二子山古墳などが存在する。さらに通常は「春部郡」とさ

れているが、後述するように岩倉市の大地遺跡群との関係から小牧市小木に存在する宇都宮古墳・浄音寺古墳などの小木古墳群も、ここでは五条川水系の「瀬波」の古墳に加えて総括しておきたい。

さて瀬波の地域での大型古墳造営の嚆矢は、3世紀中頃と推定し、現状では1つは大口町の小口白山1号墳であり、2つ目には犬山市の東之宮古墳を考えておきたい。因みに白山1号墳の周囲は「仁所野遺跡」として2世紀の墳丘墓が現存する場面であり、瀬波の領域では代表的な集落遺跡である「余野遺跡群」内に位置し、特に注目した場所である。これらにやや遅れて小牧市の小木古墳群が造営されていく。初期の古墳は微妙に造営時期を前後させながらも「瀬波」郡域内で逸早く古墳造営に至っている地区である。なおこれらはすべて前方後円墳ではなく、前方後方墳であるといった共通した特徴が認められる点も重要である。

やがて瀬波の領域での最初の大型「前方後円墳」が造営される。概ね4世紀前半期と想定し、犬山市の青塚古墳と各務原市鵜沼の坊の塚古墳が相当する。前者は123 mで尾

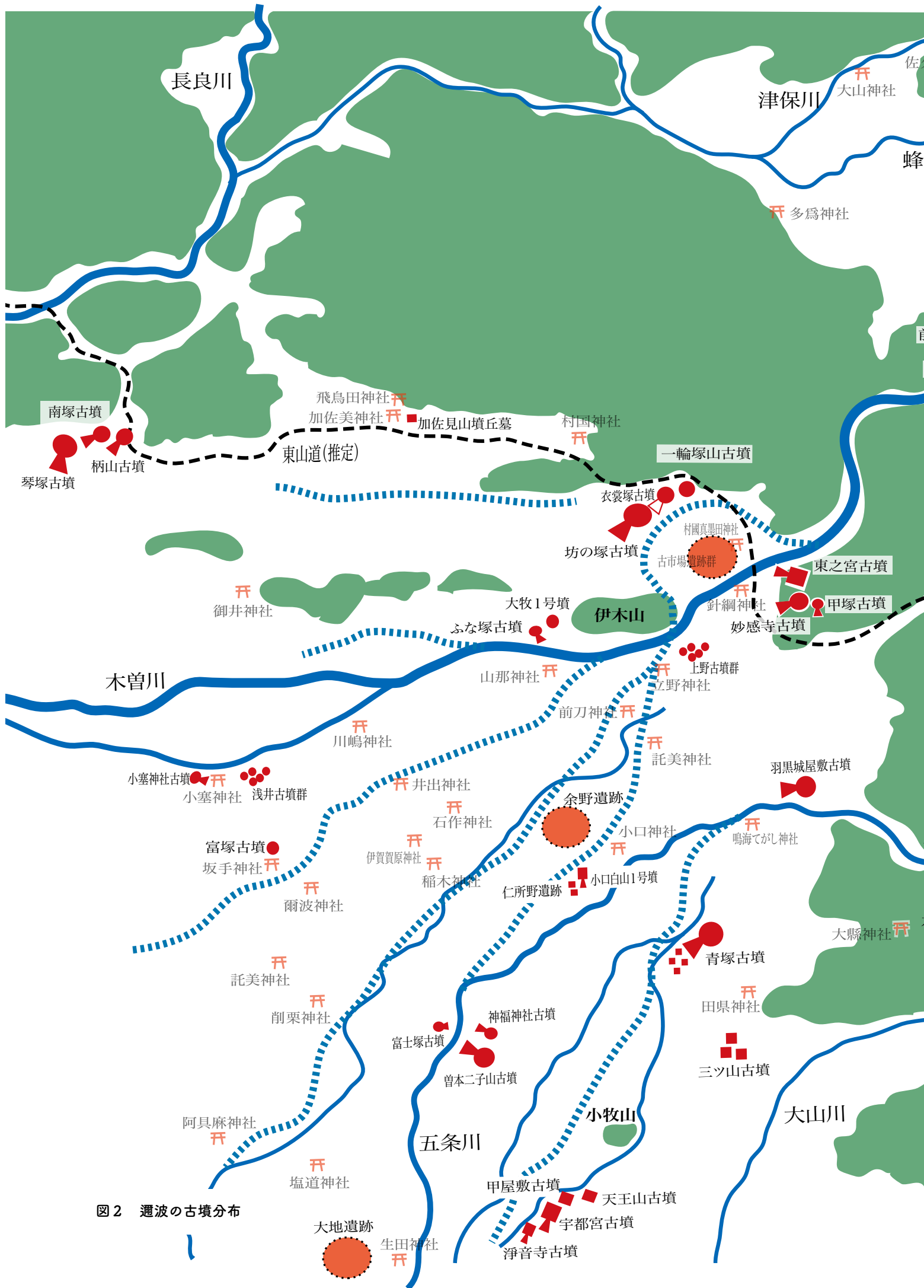


図2 遷波の古墳分布

張国第二の大型前方後円墳であり、後者は120mで美濃国第二の規模を誇る大型墳でもある。その後は、5世紀初頭になると盾型周濠と堤を備えた大型前方後円墳である妙感寺古墳が造営された。ところが妙感寺古墳の造営以後、犬山扇状地に展開した大型古墳の造営は終焉を迎えることになる。5世紀以降は、木曾「河」が分流した小河川水系単位で小規模な古墳が造営されていくことになる。しかし大型墳の造営が途絶えていた邇波に、やがて再び前方後円墳が登場する。小折古墳群（大口町・江南市）である。概ね5世紀末葉から6世紀中頃にかけてであり、犬山扇状地では最後の大型墳の造営となる。その評価は富士塚古墳において尾張型埴輪の使用などを考慮すると、この時期になって初めて「尾張連氏」との関係が想定できる。

4・邇波の民の登場

以上、犬山扇状地での主要古墳の動向を見てきたが、ここで集落遺跡を中心にして「邇波」の世界を大まかに整理しておきたい。まず旧石器時代の遺跡としては、犬山扇状地を

取り巻く東部丘陵を中心として幾つかの遺跡が確認できる。特に入鹿池周辺には「入鹿池遺跡群」として遺跡が集中するようであり、小牧山周辺や段丘堆積層上も加えて、今後の展開によつては旧石器時代の遺跡がさらに多く発見される可能性が高い。次に縄文時代であるが、大規模な集落遺跡は確認できず、早期には犬山市の上野遺跡・大口町北替地遺跡、早期から中期に大口町下林遺跡、中期では犬山市栗栖の尾崎遺跡や一宮市佐野遺跡。後晩期では大口町余野遺跡群や一宮市三ツ井遺跡などが点在する。そのうちで縄文時代中期以降人々が集う最も注目したい地区がある。それは岩倉市大地町周辺の遺跡には何故か縄文人が集まってくる場面が存在した。ここには縄文人が集う何者かが存在するようだ。邇波の領域の最南端に位置し、その動きはやがて大地遺跡とその周辺部に展開する弥生・古墳時代の集落遺跡へと受け繋がっていく。

岩倉市域を除くと、やはり犬山扇状地での本格的な集落遺跡と人々の恒常的な営みの明確な痕跡は、弥生時代中期を待たねばならない。例え

ば一宮市域になるが、猫島遺跡は中期後半期を中心とした集落遺跡として興味深い存在である。

さて邇波の領域における弥生後期から古墳時代の拠点的な集落遺跡を挙げるとすると、まずは大口町の余野遺跡群が注目される。次に岩倉市の大地遺跡とその周辺の遺跡群。そして「沼」の鵜沼古市場遺跡群を想定したい。何れにしても弥生後期から古墳時代前期頃になると小規模な集落遺跡が爆発的に増加し、木曾川から分流した小河川単位で生活を営む状況が生み出されていく。この風景が現在まで続く犬山扇状地の原型と考えられ、此処に地の神々が奉られ、泉が湧きでる場面に小規模な集落が営まれ始める。ムラムラができ、河による水運が情報を伝え、人々の往来を支えていった。

犬山扇状地での遺跡を繋ぐ地域間の基軸は、岩倉市の大地遺跡から大口町の余野遺跡群、そして上流の鵜沼古市場遺跡群への導線と推定し、この基軸を中心として扇状地としての邇波のまとまりが次第に形とまとまりを作り始めていったものと思われる。そしてやがて3世紀、古墳時

代の登場とともに、まず犬山扇状地中央部に存在する余野遺跡群において始めて古墳造営が開始される。白山1号墳の登場である。少し遅れて鵜沼古市場遺跡群を中心とした社会から、東之宮古墳を嚆矢とする「沼」の大型古墳群が次々と造営を開始、同時に岩倉市の大地遺跡では小牧市の小木古墳群の造営に至るものと推定しておきたい。

このように古代邇波の景観とその風景は、犬山扇状地を中心に、その周囲に発達した段丘堆積層とそこに流れ落ちる木曾・五条「河」の流れを生活および物流の営みとして、岩倉市大地遺跡から大口町余野遺跡群、各務原市の鵜沼古市場遺跡群を基軸とし独自の領域を形作ってきたものと考えておきたい。

【参考文献】

- 1981、『愛知県地名』、日本歴史地名大系第23巻、平凡社
- 『KISSO』Vol.59、Vol.66、Vol.92、国土交通省中部地方整備局木曾川下流河川事務所
- 赤塚次郎、2014、「邇波の東之宮古墳」『史跡東之宮古墳』、犬山市埋蔵文化財調査報告書第12集
- 赤塚次郎、2017、「木之下城から犬山城下町へ」『古地図で楽しむ尾張』、風媒社

蓮池・西山古墳群周辺の

新規発見古墳について

― 邇波の遺跡踏査成果その3 ―

NPO法人 古代邇波の里・
文化遺産ネットワーク
服部 哲也 近藤 健一

1. はじめに

NPO法人ニワ里ねっとでは、平成24年度より犬山市文化遺産活用活性化事業に参加しているが、地域の遺跡や文化遺産を再確認・新発見するための「自主的な悉皆調査や分布調査」も併行して実施している。その成果の一端は研究紀要「邇波」にて報告してきた（註1）。今回は、平成28年度青塚古墳ガイダンス施設企画展として開催した『楽田、埋もれた未知の歴史展』に合わせて、楽田地区の踏査を重点的に実施し、蓮池古墳群と西山古墳群の周辺にて新たに古墳を確認したのでここに報告する。

現在、「愛知県遺跡地図（Ⅰ）尾張地区」（以下「県遺跡図」とする）に記載されている犬山市南東部（蓮池・西山周辺）の古墳は、犬山市側で蓮池1～3号墳（図1―159～161）、蓮池古墳（168）、西山1～6号墳（162～167）、刀塚古墳（158）、鳥坂古墳（151）。そして、小牧市側では新池古墳（169）、野口古墳（175）などである。その多くは調査されることもなく滅失しており、このエリアで現存が確認できたの

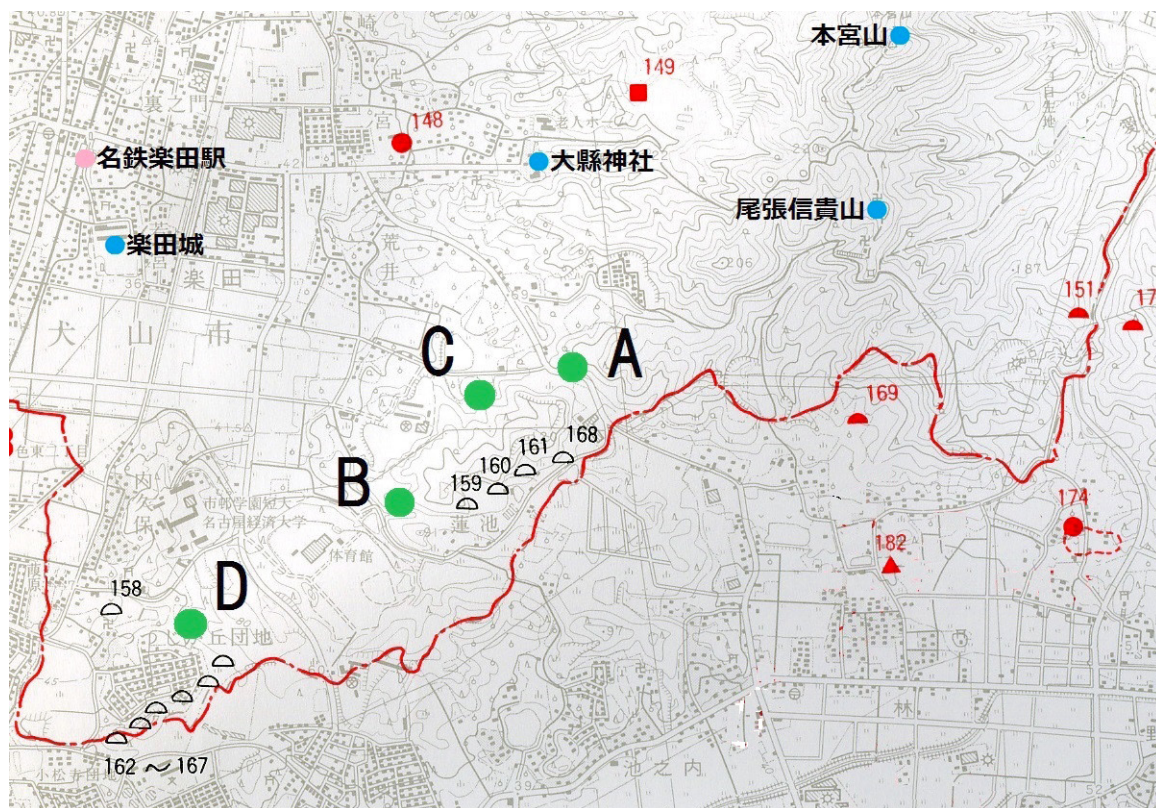


図1 今回発見の古墳と周辺の遺跡
（愛知県教育委員会、1994、『愛知県遺跡地図（Ⅰ）尾張地区』に古墳～古代の遺跡を抽出し加筆）

A～D…報告の古墳地点 159～161…蓮池1～3号墳、168…蓮池古墳、162～167…西山1～6号墳、158…刀塚古墳、151…鳥坂古墳、169…新池古墳、175…野口古墳、148…小路遺跡（古墳～中世）、149…神宮寺跡（古代）、174…鳥坂遺跡（古墳・中世）、182…平野古窯（飛鳥～奈良・須恵器窯）

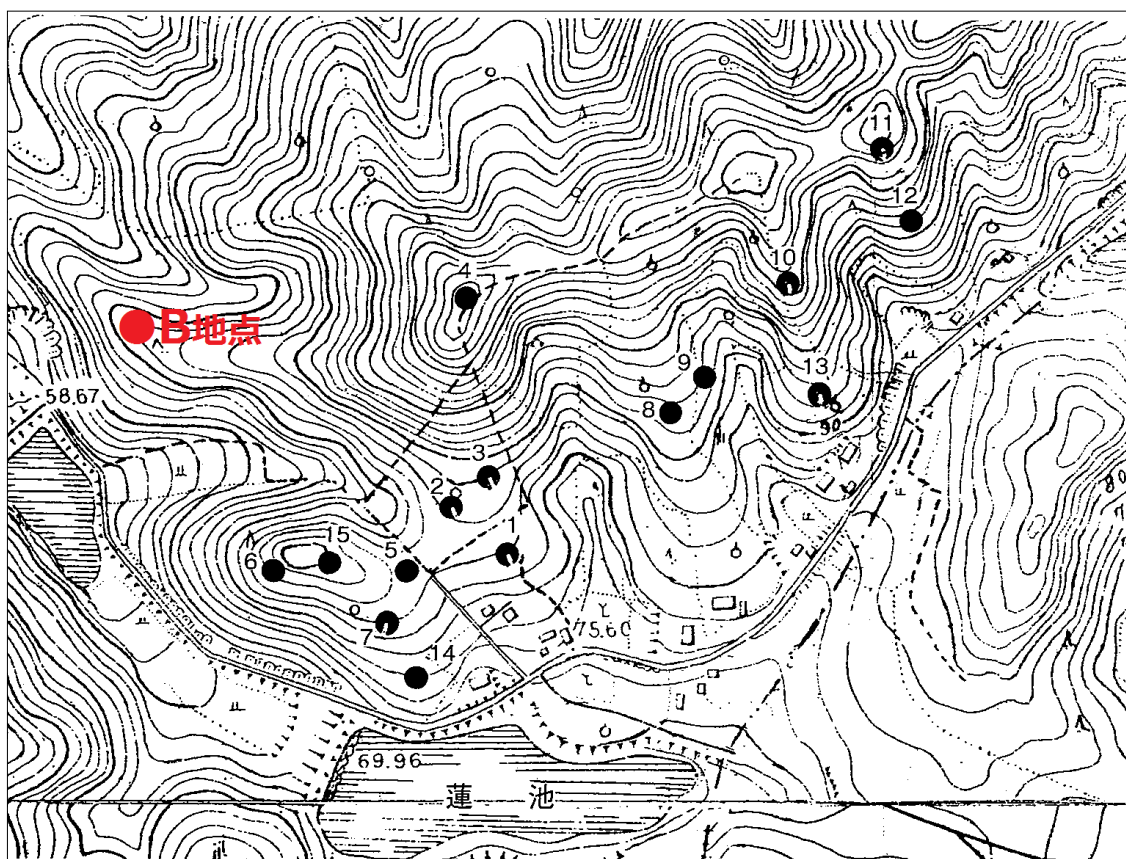


図2 蓮池古墳群 (註2の分布図にB地点を加筆)

は、鳥坂古墳・新池古墳・野口古墳の3基に限られた。また、正式な発掘調査が行われた古墳も無く、わずかに蓮池2号墳が緊急的に行われた(未報告)にすぎない。このように詳細不明な古墳が多い現状ではあるが、地区内で前中期の古墳は確認されていないため、「古墳時代後期の横穴式石室を内部構造とした小古墳群」の点在する地区といえよう。

2. 蓮池古墳群周辺

蓮池・西山古墳群は、南西方向に舌状に延びた尾張丘陵の端部に立地する。東に蓮池古墳群、西に西山古墳群の位置関係である。

蓮池古墳群は、昭和26年1月火葬骨を収めた石櫃が横穴式石室内から発見されたことが契機となり、南山大学が緊急に調査を行った。その時に周辺の古墳踏査も行われたようであり、作成された分布図には15基が記入されている(註2・図2)。今回の現地調査でも「県分



写真1 A地点古墳 墳丘中央の落ち込み

布図」に加えて、この南山大作成の分布図の古墳地点も現地確認し検討したが、残念ながら1基の古墳も痕跡すら認めることはできなかった。そこで調査の範囲を周辺へ広げて踏査が続けたが、結果、3基の古墳を発見することとなった。これまでは南に延びる枝丘陵上でのみ確認されていたが、北や西へ延びる枝丘陵上にての発見である。



写真2 B地点古墳 横穴式石室



写真3 B地点古墳 横穴式石室



写真4 C地点古墳 横穴式石室

中央部に長さ4 m・最大幅1.5 m・深さ60 cmの東西に細長いくぼみがあり、西に開口する横穴式石室の石組を確認することができ。石室材は天井石2個、北側壁の石2個、南側壁の石1個の計5個が露出している。天井石はいずれも見える範囲で長さ100 cm・幅60 cm・厚さ40 cmほど。1

A地点古墳 (図1A地点。写真1)

所在地…犬山市字倉曾洞

現況…物狂峠の北側、西に向って延びる尾根の上にマウンドが存在する。マウンドは直径10 m・高さ2 mの円形を呈し、中央部に直径3 m・深さ1.2 mの円形のくぼみがある。このくぼみは盗掘孔もしくは埋葬施設の陥没による落ち込みと考えられる。周辺に石材は確認できず、羨道部にあたりそうな地点の落ち込みもないため、竪穴系の石室か初期の横

穴式石室を埋葬施設とする可能性もある。埴輪や副葬品にかかわるような遺物は確認できなかった。

B地点古墳

(図1・2B地点。写真2・3)

所在地…犬山市字蓮池

現況…西北に向って延びる尾根の上にマウンドが存在する。樹木がなければ眺望の利く好地である。マウンドは直径20 m・高さ3 mの円形で、この地区の古墳としては大

きい。中央部に長さ5.5 m・最大幅2.5 m・深さ1.5 mの東西に細長いくぼみがあり、西に開口する横穴式石室の石組を確認することができる。石室材は天井石1個と北側壁の石6個の計7個が露出している。天井石は見える範囲で長さ170 cm・幅120 cm・厚さ70 cm、側壁の最大の石は見える範囲で高さ45 cm・幅50 cmを測る。副葬品にかかわるような遺物は認められなかった。横穴式石室を

埋葬施設とした後期古墳である。

C地点古墳

(図1C地点。写真4・5)

所在地…犬山市字蓮池

現況…北西に向って延びる尾根の上にマウンドが存在する。当地も樹木が無ければ眺望の利く好地と思われた。マウンドは直径20 m・高さ2.5 mの円形で、全体にシダが生えている。ほぼB地点古墳と同規模であり、この地区の古墳としては大きい。

個は片側が石室内に落ち込み、もう1個は広い面を東西に向けて石室内に落ち込んでいる。北側壁の石のうち1個は見える範囲で高さ20cm・幅40cmを測る。周辺に副葬品にかかわるような遺物は認められなかった。横穴式石室を埋葬施設とした後期古墳である。



写真5 C地点古墳 横穴式石室



写真6 D地点古墳 墳丘と石材



写真7 D地点古墳

D地点古墳

(図1D地点、写真6・7)

所在地：犬山市字樋池

現況…西に向って延びる尾根の裾にマウンドが存在する。周辺には果樹園の跡と考えられる段々地形が所々見られる。マウンドは直径15m・高さ2mの円形を呈し、中央部に2個の石材が露出している。1個は見える範囲で長さ100cm・幅70cm・高さ50cm、もう1個は見える範囲で長さ80cmを測る。2個の石材は北東―南西方向に2m離れている。石材が石室として組み立てられている確実な様子は確認できなかったが、墳丘も残ることから横穴式石室石材の露頭したものと考える。周辺に副葬品にかかわるような遺物は認められなかった。

なお、『地歴学報第9号』(註4)では「前池の東の果樹園の中には石室が存在していたと言うが現在その痕跡すら残っていない」との記載が

3. 西山古墳群周辺

西山古墳群については、蓮池古墳群以上に情報がない。宮川芳照氏は1号墳・2号墳が南山大学によって調査された(2号墳の調査年は1953年)と記している(註3)が、詳細は不明である。また、西山古墳群の北約300mには刀塚古墳(図2-158)が単独に存在したとされている。木棺直葬の内部

構造で刀子1、土師器片3点出土し、「宮川芳照保管」と記載されている(註3)ものの、こちらも詳細は不明と言わざるをえない。今回、踏査範囲を広げた結果、西山古墳群と刀塚古墳の中間にて、1基の古墳の可能性ある地点を確認することとなった。

ある。「前池」は今回確認したマウンドの西方にある溜池を指すと考えられ、地点的には一致する。周辺に複数の石室墳が存在した可能性も含めて、今後の検討課題である。

4. おわりに

今回の踏査では、4か所にて新たな古墳の可能性を確認した。犬山市内の分布調査は、1983年の『犬山市史資料編3』の完成時までに完遂されていたとの印象があったが、またもや新規の古墳を発見するに至り、あらためて市域全体の計画的な分布調査の実施を求めたい。

さて、蓮池・西山古墳群の踏査として最も大きな成果は、これまで知られていなかった、丘陵の北や西斜面にて古墳を確認したことである。既知の南斜面のみの群構成では、その造墓基盤もおのずと丘陵南側、すなわち小牧市側とする印象であった。ところが、今回の発見により、その造墓基盤を犬山市側の楽田地区をも含めた、広範囲とすることにいったのである。

古墳時代後期～古代の楽田地区の遺跡を概観すれば、蓮池古墳群約

1・2km北に式内社大縣神社が鎮座し、その大縣神社北東に神宮寺廃寺(古代)、北西に小路遺跡(古墳～中世)が知られる(図1)。また蓮池古墳群約2・6km北西には、創建が7世紀(白鳳期)に遡ると考えられる角池廃寺(楽田廃寺)も位置している。そして、蓮池2号墳からは火葬骨を収納した石櫃(蔵骨器)が出土しており、他の古墳からも8世紀以降の須恵器が出土している。これらは追葬の資料ではあるが、当古墳群が8世紀以降も墓域として機能していたことは明らかであり、俄然楽田地区の寺院や集落跡との関連が注目されるのである。

犬山市楽田地区は、古墳時代の終末から寺造りへの時代の転換期を考える重要な地区であり、新しい時代の胎動が感じられるエリアとしてますます注目されよう。

【註】

註1 服部哲也・近藤健一、2014、「入鹿池周辺の古墳踏査成果について」『研究紀要「邇波」創刊号』

服部哲也、2016、「大平山周辺の古墳踏査成果について」『研究紀要「邇波」3号』

註2 安東義弘・松原隆治・伊藤秋男、2007、「中山英司と愛知の遺跡」『伊藤

秋男先生古希記念考古学論文集』

註3 宮川芳照、1999、「犬山市の遺跡目録」『味美二子山古墳の時代(第2分冊)』

註4 愛知県立犬山高校地歴クラブ、1972、「楽田東部丘陵地区 刀塚古墳」『地歴学報 第9号』

【参考文献】

愛知県教育委員会、1994、『愛知県遺跡地図(1) 尾張地区』

愛知県立犬山高校地歴クラブ、1972、『地歴学報 第9号』

犬山市教育委員会、1972、『十三塚古墳熊野神社第1号墳』

犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会、1983、『犬山市史』資料編3 考古 古代・中世

犬山市教育委員会、1968、『上野古墳群』

伊藤秋男先生古希記念考古学論文集刊行会、2007、『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』

春日井市教育委員会、1999、『味美二子山古墳の時代(第2分冊)』

犬山焼における押印と銘

三代尾関作十郎信敬の印

犬山市文化史料館

井上 あゆこ



1. はじめに

やきものは、主にその地名から名称が付けられている。その土地で粘土の採掘から成形・焼成に至るまでの工程を賄うためでもあるが、窯業地が隣接すると製品の胎土や釉調で明確に産地を区別するのは困難な場合がある。

戦後、窯業地によつては鉢山が減少し、遠隔地の粘土に依存せざるを得ない状況になったが、流通の進歩に伴い、遠隔地の粘土の入手も容易になった。また、精製や焼成技術の発展により、全国各地で画一的な製品が好まれるようになってからは、窯業地の特色が薄れてきているように思われる。その一方で江戸時代以降のやきものの中には生産地や陶工を明確にする押印や銘が施される場合もあり、産地同定に有効な手掛かりとなってきた。

文化七年（一八一〇）から犬山の

地で生産されたやきものに犬山焼がある。犬山焼は美濃焼に類似する胎土を利用して、赤や緑を基調とした「赤絵」や、桜と紅葉を施した「雲錦手」などの上絵付が施される点特徴である。その絵付に伴い「犬山」や「乾山」の銘が鉄鏝で施されるものや、「犬山」などの押印が見られるものがある。押印や銘は窯や陶工によつてさまざまな種類があり、製作年代を特定する手段となる。

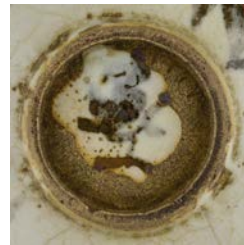
本稿では、犬山焼の窯元として最も歴史のある尾関家の所蔵する押印を採り上げる。その中でも、三代尾関作十郎の押印と作品を検証し、犬山焼研究グループ「犬山焼ミュージアム」で調査した犬山焼の中から同じ意匠の押印を提示して、製作年代を分類する手掛かりのひとつとして検討したい。

2. 丸山焼と犬山焼

犬山焼は、余坂村丸山新田（現在の犬山市丸山）で生産が始められ、犬山城主成瀬家の庇護により発展してきたやきものである。丸山の地で生産されたため、当初は「丸山焼」と表記されていた。公益財団法人犬山城白帝文庫の資料によると、天保十一年（一八四〇）七月二日には「俊恭院（斉温室福君）へ丸山焼皿・丼を贈る」とあり、天保十二年（一八四一）二月一日には「斉朝へ犬山焼鉢、御肴料千疋を贈る」とある。ここで丸山焼と犬山焼の記述が見られるが、天保十二年（一八四一）六月二十六日には「維君へ丸山焼鉢・忍芟酒・不二の露を贈る」とあり、丸山焼と犬山焼は同様に扱われていると考えられる。ただし現段階では、成瀬家より贈られた品を確認していないため、銘・押印の有無や、どの

ような絵付が施されていたかなど詳細は不明であるが、陶工の加藤清蔵と松原惣兵衛、赤絵師の道平が犬山で活躍した時期であり、彼らによる製品の可能性が高いと考えられる。

犬山焼の紀年銘が確認できる事例は、清蔵・惣兵衛・道平が針綱神社に奉納した赤絵瓶子（針綱神社）や、惣兵衛が東之宮社へ奉納した赤絵狛犬（東之宮社）などがある。しかし、犬山焼の製作年代に繋がる銘が見られるのは今のところ一八三〇年代頃からで、文化七年（一八一〇）創業当時の犬山焼がどのような内容であったかは不明である。ただ、成瀬家臣で明治維新後は犬山焼陶画研究に尽力した近藤秀胤（一八三〇～一八八九）の『犬山焼陶器由来』には、京都粟田口より招聘した陶工の藤兵衛と久兵衛により、京都の粟田口焼に似た薄作りの製品であったとされているが、絵付に関しての記述は見られない。犬山焼雲錦手の銘は、ほとんどが鉄鏝を用いて高台の内底部や脇に「乾山」（写真1①）や、「犬山」（写真1②）などが書かれるものである。「乾山」銘に関しては、今までの犬山焼調査で、赤絵に書か



①「雲錦手碗茶」犬山市文化史料館 田中コレクション



②「雲錦手徳利」犬山市文化史料館



③「雲錦手鉢」愛知県陶磁美術館



④「赤絵犬山八景図徳利」犬山市文化史料館



⑤「赤絵果実形水指」犬山市文化史料館 田中コレクション

写真1

れていることはない。また、犬山焼には「乾山」の押印も見当たらない。

犬山焼の乾山銘は、現在までの調査において雲錦手のみに確認できる書銘である。「犬山」の銘は一画目の下に四画目の「ノ」が置かれる形が多いが、写真1③のように一画目の上に置かれる形も稀にみられる。また、写真1④のように朱で銘が書かれる作品もある。この「犬」が大きく「山」を包み込む形は、押印（写真1⑤）にも見られる。

3. 犬山焼に関する社印

慶応三年（一八六七）に窯株を譲り受け、以後、現在まで操業を続けている犬山焼窯元の尾関家で保管される押印が発見できた。ここでは社印と

三代尾関作十郎の印を中心に、その押印が施された犬山焼を紹介したい。

写真2の印は、犬山焼に施されたものではなく、大きさから見ても書類等に使用された印と考えられる。明治四年（一八七二）の廢藩置縣に伴い、犬山藩士の士族授産（明治新政府が旧武士層の生活救済のために行った政策）として、明治十六年（一八八三）に、代尾関作十郎信実が「犬山陶器会社」を設立した。写真2①③は石製の犬山陶器会社の印である。写真2④は「犬山陶磁器有限会社」とある。これは、日中戦争から第一次世界大戦へ移行しつつある昭和十三年（一九三八）の国家総動員法により、犬山焼窯元の七軒が統合した有限会社である。しかし、

昭和二十年（一九四五）八月十五日の終戦を迎えて解散した。

4. 三代尾関作十郎の印

昭和九年（一九三四）に記録された資料によると、三代尾関作十郎は二代作十郎の長男・翼郎として慶応元年（一八六五）三月七日に生まれている。三代尾関作十郎信敬とし、昭和十八年（一九四三）二月十三日に没す。

写真3の印は三代尾関作十郎が使用していたものである。印の使用頻度による消耗や、素地の状態、焼成の前後の収縮があるため、多少の歪みが考えられるが、文字の特徴を中心に写真4の実作品の押印と比較していく。

写真3①③は△に「犬山」の印



写真2

で、犬山焼調査でも最も多く見られる形である。写真3①は△の底辺が一・六センチで、「山」の一画目が太く、三画目が僅かに離れている。これは写真4①・②にも見られる文字の特徴であるが、「犬」の太さと△の角の違いがある。写真4①の△の底辺は一・五センチで、写真3①の印が使用されたと思われる。写真4②の△の底辺は一センチで、湾曲した底部脇に押されているため特徴が判断し難いが、「山」の形から

見ても写真3中の印の可能性は低い。写真3②は△の底辺が一センチ、「犬」の三画目が離れ、「山」の三画目が開き気味である。写真4③・④の△の底辺はともに一センチであり文字も類似しているが、写真4③の△枠はやや丸みを帯びている。違う印の可能性もあるが、成形素地の歪みや押し方の影響も考えられる。写真3③の△の底辺は一・二センチで、角に丸みがあり写真4⑤に似ているが、実際に印を押してみると写真4⑥に似ていた。また、尾関家で保管されていた印の中には見当たらないが、写真4の⑦・⑧のように△枠の底辺中央が離れている押印も見られる。写真3の④・⑨は全て「三作」の印である。写真3⑩は、印を押した時に右行「犬山」、左行「三作」となる印で、写真4の⑨・⑩に見られる直径一・二センチの押印に使われたものと思われる。写真3⑪は、中央縦に「三作」、右に「犬」左に「山」は配される印である。写真3⑫は右行に「犬山」、左行に「三作」。写真3⑬は上部の正方形に「犬山」、下部の正方形に「三作」とある。



⑥「雲錦手銘々皿」犬山市文化史料館



①「雲錦手瓢型花器」犬山市文化史料館



⑦「雲錦手徳利」光陽寺



②「赤絵徳利」犬山市文化史料館



⑧「赤絵花鳥文蓋付茶碗」愛知県陶磁美術館



③「雲錦手四方鉢」光陽寺



⑨「白釉茶碗」犬山市文化史料館



④「赤絵鳳凰麒麟文火入」犬山市文化史料館



⑩「色絵鶺鴒図茶碗」犬山市文化史料館



⑤「雲錦手鉢」光陽寺



⑧



①



⑨



②



⑩



③



⑪



④



⑫



⑤



⑬



⑥



⑦

写真4

三代 尾関作十郎 作品と押印

写真3

三代 尾関作十郎の印

5. 押印と作風

筆致について検証する場合、雲錦手は非常に比較し易い素材である。特に点で表現される桜花の筆運びや、紅葉の塗りに見られる筆遣いは各々の特徴がある。葉先が5〜7裂のものや、葉先の太さも数種類ある。写真4①・③の紅葉は5裂で均等な太さの葉先である。写真4⑤・⑥は、紅葉の上部三裂が大きく描かれ、下部二裂が小さい特徴的な葉形である。写真4⑦は7裂の紅葉が緑のみで描かれている。桜花を表現する緑の3点書きは、正三角形を形作る写真4①・③・⑤・⑥と比較して、二等辺三角形の配置で、白の3点書きも広がりがない。

近代の犬山焼には量産品もあり、窯元では数人の職人による分業制で生産された。赤絵のほとんどに銘がなく、雲錦手は犬山か乾山の鉄錆の銘で、現在まで調査した犬山焼の中でも押印が施されたものは一部にすぎない。調査した作品数は充分ではないが、押印が見られるものは少なく、あつらえものを意識した可能性も想定できる。写真3⑩の印が使用されている作品について、写真4⑨は長石釉を施し、

鉄の吹出しと気泡が見られる絵付の無い茶碗である。写真4⑩は、長石釉を施し、水辺の杭に止まる鶴鴿の図が鉄錆と呉須の二色で描かれている。典型的な犬山焼とは異なる作風で三代尾関作十郎の個性が反映された作品である。年代による作風の変化か、意識的に使い分けていたかは不明であるが、今後も押印と作風の関連性について検討を続けていきたい。

6. おわりに

犬山焼の胎土は美濃焼と類似するが、赤絵や雲錦手の上絵付が華やかに施される点が犬山焼の特徴である。十七世紀初め頃に中国呉州赤絵が九州に伝わり、有田焼（佐賀県）で赤絵が模倣された。その後、京焼（京都府）・三田焼（兵庫県）・万古焼（三重県）でも赤絵が生産された。犬山焼は創業当初、京都の陶工を招聘しているため、京焼の赤絵技法の影響を受けた可能性が高い。

各窯業地において赤絵や雲錦手が生産される中で、犬山焼と断定するためには、押印・銘が明確な証となり窯元や陶工の特定も可能となる。一方、成形の後に施される書銘や

絵付などの筆致から窯元や絵付師を判断するは非常に困難である。生地や絵付については外注や、素焼きの器を絵付師の元へ運んで依頼していたとの記述もある。鉄絵具を用いた「犬山」「乾山」などの書銘は絵付師によるものと考えられるが、量産品を目的とした分業制の製品では窯元や絵付師の確実な特定はほぼ不可能である。犬山焼の絵付に関わる人物は、福本雪潭、道平、松原惣兵衛、村瀬太乙、近藤秀胤などが挙げられるが、現在までの調査で絵付師を断定できた製品は数点にすぎない。

現在、犬山焼が継承されている窯元は尾関窯・後藤窯・大澤窯の三軒のみである。昭和初期には尾関窯・吉野窯・後藤窯・青山窯・紀藤窯・勝野窯・正進堂（伊藤窯）・大澤窯の八軒があったとされる。すでに廃窯した窯元については調査が困難となっている。

犬山城主成瀬家の御庭焼と称された犬山焼であるが、公表されている文献史料は非常に少ない。犬山焼の剽軽な赤絵や、桜花の表現が特徴的な雲錦手の文様は、他窯業地の作品と比較しても特徴がある。犬山焼を重要な文化遺産の一つととらえ、今

後も文献を含めた資料の収集と分析を継続していく事が重要と考える。

本稿の執筆にあたり、ご指導ご協力を賜りました関係各位に對し、ここに記して深く感謝の意を表します。（敬称略、五十音順）

愛知県陶磁美術館 光陽寺
青木修 江崎武 尾関作十郎
佐久間真子 田中竹二郎 中野耕司

【参考文献】

- 石原延雄、1893、『犬山陶業沿革』
柴田貞一、1964、『犬山焼陶器史』『地方史研究』一四（六）、地方史研究協議会
愛知県陶磁資料館編、1980、『犬山焼展―よみがえる華麗な世界―』、愛知県陶磁資料館
犬山市史編さん委員会編、1989、『犬山市史史料編六 近代・現代』、犬山市教育委員会
犬山市史編さん委員会編、1991、『犬山市史史料編五 近世 下』、犬山市教育委員会
横山住雄・帚舛亭、1995、『犬山焼窯元五代尾関作十郎の世界』、（財）岩田洗心館
愛知県陶磁資料館編、1999、『犬山焼―浅井コレクション―』、愛知県陶磁資料館
横山住雄、2009、『明治・大正・昭和の犬山焼』『美文芸報』四八〇号、美濃文化財研究会
青木修・大塚友恵・中野耕司、2014、『今井焼―成立とその生産内容―』『研究紀要 瀬波 創刊号』、NPO法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
青木修、2016、『犬山焼研究における現状と課題』『研究紀要 瀬波 第3号』NPO法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
井上あゆこ、2016、『犬山焼の魅力―犬山焼文様の分類と考察―』『研究紀要 瀬波 第3号』NPO法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク

犬山焼に登場する動物たち

— 龍と獅子を中心に —

愛知県陶磁美術館
佐久間真子



1 はじめに

犬山焼は、文化七年（一八一〇）に尾張藩の付家老であった成瀬家の所領内で創業した。その犬山が位置する尾張国は、長く大窯業地として瀬戸が栄えており、さらに美濃窯が山を隔てて隣接していた。この地域的特徴は、犬山焼の特徴に大きく関わってくる。犬山焼の詳細や最新の調査報告について

では、本誌第三号に掲載の青木修氏の論に詳しい（註一）。

犬山焼の製品の多くは、赤絵を施した陶磁器である。染付や鉄絵といった下絵付を主力製品する瀬戸・美濃窯とは異なるやきものを展開することによって、競合を避けていたとも考えられる。赤絵は大きく二種類に分けられ、ひとつは「呉州赤絵写」、もうひとつは「雲錦手」である

る（写真1-1、1-2）。

「呉州赤絵写」には、動植物文や、人物文、文字文、風景図、帆船図、仙境図など様々な意匠がある。そのなかでも、動物は数多く描かれ、モチーフとなる動物の種類も多様である。犬山焼の動物たちは、繊細な筆致と迫力ある表情で描かれるものもあるが、多くは写実的な表現からは大きく離れてデフォルメされている。とくに本稿ではこうした動物を紹介し、その魅力に迫ってきたい。

なお、本誌第三号に掲載の井上あゆこ氏の論にも、多彩な動物が紹介されているのでぜひ参照していただきたい（註二）。

その前に、まずは「呉州赤絵写」について情報を整理しておこう。

2 呉州赤絵と、犬山焼の呉州赤絵について

前述したように、犬山焼の最大の

魅力は赤絵である。特に上手の製品を別として、全般に胎土や成型、焼成などの技術については大産地である瀬戸・美濃に劣るといえよう。上絵付はそれらの欠点をカバーし、さらに流行の文様をとり入れることで、製品に付加価値を与えられる技法なのである。

では、そもその呉州赤絵とはどのようなやきものなのか。漳州窯の呉州赤絵（写真2-1）について少し詳しく紹介しておく。

このやきものは現在の中国福建省南端部である漳州地域において、十六世紀末頃から生産された。染付のみの呉州染付（とくに中国産の染付は青花と呼ばれる）、染付と上絵付を併用した呉州赤絵がある。いずれも中国官窯の緊張感のある製品とは異なり、民窯ならではの素朴さや大胆さが、日本をはじめ広く東南アジアからイスラム圏、ヨーロッパの人々にまで好まれ、世界中に流通した。

国内のもっとも古い出土例は一五八〇年代と推定される根来寺（和歌山県岩出市）とされ、さらに一六一〇年代初頭には九州の名護屋



写真1-1 「赤絵玉取獅子大皿」
愛知県陶磁美術館（浅井藤雄氏寄贈）



写真1-2 「色絵雲錦手片口鉢」
愛知県陶磁美術館（浅井藤雄氏寄贈）



写真2-1「五彩花文盤」 明時代後期（17世紀前半）
愛知県陶磁美術館（加藤舜陶氏寄贈）



写真2-2「色絵州浜形変形皿」 奥田頼川
愛知県陶磁美術館（辻清明コレクション）

や、大阪をはじめ、京や江戸などの大都市からも出土例が多くなる。つまり活気あふれる戦国時代に、戦国武将やその周辺の人々によって収集され使用されたと推測される。その後、明から清への政変によって沿岸で輸出にかかわっていた勢力にも影響が及び、十七世紀中頃には輸出のほとんどが停止したようだ（註三）。

日本は、中国産の呉州赤絵を受け入れるだけでなく、さっそくその写しを生産している。始めは十七世紀中頃に肥前の有田、続いて十八世紀には京都、そして三田などで呉州赤絵写が見られる。特に、京都の奥田頼川（宝暦三年〔一七五三〕—文化八年〔一八一二〕）が名高い（写真2-1）。これらの呉州赤絵写は、明治以降も各地で生産され続け、和食器の様式として定着し現代にいたっている。

さて、犬山焼の赤絵は、京焼から影響を受けて天保初年（一八三〇）頃には成立していたとされる。これは、江戸期の色絵磁器の生産地としては後発であり、また、生産規模も大きいわけではない。しかし、瀬戸・美濃窯との差別化を目指し、赤絵を中心とした製品を打ち出していく意図があったと考えられる。その中、選択した意匠のひとつが広く流行している呉州赤絵（写し）だった。

他の地域のやきものにも言えることだが、特に犬山焼の呉州赤絵写で

は、絵付のレベルが一貫していない。つまり、非常に緻密で絵画的表現としても優れたものと、そうでないものが混合している。

贈答などに用いられたと考えられる上手のものは、中国の呉州赤絵かと思ふうばかりの再現ぶりである。おそらく成瀬家の所持品あるいはその威光によってもたらされた漳州窯の製品や、頼川らのやきものを絵付師が目にし、学んだのではないだろうか。

一方、量産品にはひとつひとつ手間をかけてもいられない。手早く描かけるよう、意匠は必然的に簡略化される。現時点の調査では、江戸期の画帖や意匠に関する指示書などの資料は確認されていないが、窯のトップの絵付師以外の絵付にかかわる職人たち（丁稚奉公クラスの職人たちもいただろう）は、描くよう命じられた意匠についての教養があるわけでもなく、ただひたすら指示に従ってすばやく手を動かしたのだろう。さらにそうした製品が手本とされ幾度となく繰り返し描かれていくなかで、元は龍だったのか獅子だったのか、なんの霊獣や生き物だった

のか分からなくなっても、しかし慣れた筆致で大量に絵付が行われていったのである。

こうして、犬山焼の呉州赤絵写には様々な表現の動物たちが描かれた。次は、その中でも代表的な「龍」と「獅子」を見ていこう。

3 犬山焼の「龍」

中国においては、龍は古くから格が定められ、爪の数などの決まり事も作られつつ、やきものだけでなく着物の文様などにも広く用いられてきた。呉州赤絵においても主要なモチーフであり、器種や大きさを問わず、数多く描かれるが、さほど爪の数などの決まりに厳密にははがっていないものも多い。犬山焼の呉州赤絵写でも、龍の形態は多様で、単体の龍や双龍は器のメインに、たくさんの雲龍や雨龍（みずち）は器の側面や裏に描かれるなど、様々な箇所で見ることが出来る。

では、作品を見ていこう。明時代（一七世紀）に作られた青花（写真3-1）では、五本の爪を立て、目を見開いた龍が描かれている。これに似たポーズの龍を描いた犬山焼の



写真3-1 「青花龍文盤」 明時代（17世紀）
愛知県陶磁美術館（加藤舜陶氏寄贈）



写真3-2 「赤絵雲龍文入隅長方蓋物」
愛知県陶磁美術館（浅井藤雄氏寄贈）



写真3-3 「赤絵双龍文皿」
安藤コレクション



写真3-4 「赤絵富貴春龍文鉢」
安藤コレクション



写真3-5 「赤絵龍文皿」
犬山市文化史料館（田中コレクション）



写真3-6 「赤絵雲芝に龍文皿」
安藤コレクション



写真4-1 「赤絵玉取獅子図大皿」
愛知県陶磁美術館



写真4-2 「赤絵玉取獅子図鉢」
安藤コレクション



写真4-3 「赤絵麒麟文鉢」
犬山市文化史料館（田中コレクション）



写真4-4 「赤絵麒麟文菓子鉢」
犬山市文化史料館（田中コレクション）

蓋物（写真4-2）では、顔にかなりのアレنجジが加わっている。額、目、口などの配置が不明瞭であり、角か耳のようにも見える三角形のパーツが加えられている。これにより、本来厳しい表情であるはずの龍は、どこかとぼけたようなやわらか

い雰囲気になっている。

そのほか、龍には細かく描きこまれた上手なもの（写真3-3）もみられる一方、雲を背景に両手を広げたひょうきんな表情のもの（写真3-4）や、体を丸めたラフな筆致もの（写真3-5）など、様々な様式がある。特に写真3-6の龍は、頭に大きな赤い渦巻きをもち、丸い耳のようなものが付けられ、手足の先は丸まるなど、デフォルメが進み愛

らしささえ感じられる。

4 犬山焼の「獅子」

獅子は、厄除けのシンボルであり、龍と同じく吉祥文様として広く用いられてきた。唐草や牡丹などと組み合わせられたり、長いリボン状の紐を伴う球を持たせて玉取獅子としたり等、華やかな文様としてもアレنجジされる。呉州赤絵においては器の中心の文様として堂々とした獅子が

描かれることが多く、犬山焼でも同様である。

まずは、犬山焼の呉州赤絵写の中でも最上手に位置付けられる写真4-1である。穏やかに舞う玉取獅子が、非常に緻密で正確な筆致で描かれる。中国の呉州赤絵の力強さとも異なった、おそらく窯場の中心となる絵付師の手による優雅な表現である。

龍と同様、写真4-2のように頭

に特徴的な赤い大きな渦巻きを持つ獅子もある。この赤い渦巻きは、頭の大きさを決め、手早く動物の顔を描くのに都合がよかったのだろうか。ぐるりと渦巻きを描き、その脇に両目を配置し、鼻を小さくぐると描き、顎と口となる線を二、三本引けばすぐに獅子の顔が出来上がる（前出の龍の顔も同様である）。

写真4-3のように全身を緑で塗り込めるものもあれば、写真4-4のように頭だけでなく体も大きな赤い渦巻きで描かれるものもある。ただし、写真4-3、4-4については、大きな二本の角や鱗を持つことから、同じ霊獣でも麒麟と判断すべきか迷う。このような判断のつかぬ動物となっているものを、パーツを分析しながら謎解きをするように見るのも一興だろう。

さて、ここまで個性あふれる龍と獅子を紹介したが、呉州赤絵の基本的な構成はいずれの作品においても崩れていないことに気づかれるだろうか。皿の見込み中央に大きくメイソンのモチーフを描き、その周りを圏線で区切る。その圏線に沿って複数の窓絵を配し、窓絵と窓絵の間は四

方櫛文や幾何学文で埋め尽くすといった具合である。

最後に、こうした傾向を含め、犬山焼の動物たちの魅力のポイントをまとめておく。

5 犬山焼に登場する動物たち

筆者を含む犬山焼研究グループ「犬山焼ミュージアム」は、これまで様々な作品を目にする機会に恵まれてきた。調査を続けるうちに、犬山焼に登場する動物たちについておおむねの傾向が明らかになってきた。

まず、犬山焼に描かれる動物の種類だが、これは原典となった呉州赤絵に近いものがほとんどである。今回紹介した龍、獅子を筆頭に、鳳凰や麒麟といった霊獣、花鳥や魚といった具合に、特に目新しいものを加えることは少ない。一部、鹿やウサギなど、呉州赤絵ではあまり見かけない動物も見られるが、これは犬山焼の中でもごく少数である。

しかし、動物の描き方については、デフォルメが進み、原典をとどめていないことも多い。身体の様々なパーツが省略され、全体に簡潔な姿に描

かれるだけでなく、原典の動物には無いはずの角やひげ等が不規則に加えられることもある。この大胆なデフォルメや意外さが、犬山焼ならではの愛らしさやユニークさを演出することになっているのである。

愛らしい動物といえば、江戸後期の絵画においては円山応挙や長沢芦雪らの描いた愛くるしい犬をはじめとして、浮世絵でも戯画のなかにユニークな動物たちを見ることができ。ただ、犬山焼の動物たちはこうした絵画の流行を意図的に取り入れて描かれたかという点、そうではないだろう。おそらく、大量の呉州赤絵写を生産するにあたって、ほとんどと簡略化を進めた結果、犬山焼独自のテイストを樹立していったと言える。

このことは、先述したように、犬山焼の呉州赤絵写の構図が原典から大きく外れていないことから言える。犬山焼はそもそも、江戸期に高級品として流通していた呉州赤絵に倣ったやきものである。呉州赤絵写とわからなくなるまで全体の構図をくずしてしまうことはほばない。陶工たちは、基本的な構図だけは守ったうえで、あとはわりと自由

に描いていたと推測される。したがって、犬山焼には、多種多様な独自の動物たちが登場することになったのである。一点一点、描かれた動物たちの個性を味わいながら、作品を楽しんでいきたいものである。

【註】

註一 青木修、2016、「犬山焼研究における現状と課題」『研究紀要 邇波 第三号』、NPO法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク

註二 井上あゆこ、2016、「犬山焼の魅力―犬山焼文様の分類と考察―」『研究紀要 邇波 第三号』、NPO法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク

註三 森達也、1996、「呉州手磁器―スワトウ・ウエアーの生産と流通―」『企画展 呉州赤絵・呉州染付・餅花手―スワトウ・ウエアーの世界―』、愛知県陶磁資料館

本稿執筆にあたり、次の方々に格別のご協力・ご助言を賜りました。記して感謝申し上げます。（敬称略、五〇音順）

青木修
安藤悟
井上あゆこ
仲野泰裕

【参考文献】

1999、『企画展 犬山焼―浅井コレクシヨン』、愛知県陶磁資料館
1980、『犬山焼展―よみがえる華麗な世界―』、愛知県陶磁資料館

蓮池古墳群出土とされる須恵器について

NPO 法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
大塚 友恵

1. はじめに

本稿で取り上げる蓮池古墳群は、愛知県犬山市字蓮池に所在する小古墳群である。かつては20基程度の古墳があったとされ、そのうち発掘調査が行われた蓮池2号墳は、火葬された人骨が入った石製蔵骨器が出土していることで知られている。しかし、急速に進む戦後の開拓によって発見されたこともあり、ほとんどの古墳は記録が残されることなく滅失してしまっており、唯一、調査が行われた2号墳についても、わずかな調査図面と写真の一部が報告されているのみである（註1）。尾張地域において横穴式石室に入れられた石製の蔵骨器の例は珍しく、当古墳群は古墳時代終末期の葬制を考える上でも注目すべき古墳であり、再検討する意義は十分にあるものと考ええる。

2. 蓮池古墳群の概要

青塚古墳ガイダンス施設で開催した企画展『楽田、埋もれた未知の歴史』（開催期間…平成28年12月6日（火）～平成29年2月5日（日））にともない、現地においてこの蓮池古墳群について聞き取り調査及び分布調査を行った。結果、地元の方への聞き取りによって、当古墳群から出土したとされる資料を2点確認することができた。本稿では、まず調査・研究史をまとめ、当古墳群について概観するとともに、この新規資料の紹介をしたい。なお周辺の分布調査では、新たに複数基の古墳が発見されている。この踏査成果については、本誌掲載の服部哲也氏・近藤健一氏の報告を参照されたい。

し、犬山市東部に拡がる尾張丘陵の西縁部にあたる。四方を標高90～120mの低い丘陵に囲まれた狭小な盆地状の地形に、地名の通り「蓮池」といわれる溜池があった。この池の北東にある丘陵が、1946（昭和21）年から開墾されて集落が形成された。山頂付近から南東斜面側が大きく削られ、現在は崖状の地形となっている。この南東斜面にあった小古墳群を「蓮池古墳群」と称している（註2）。

当古墳群について、1967（昭和47）年発行の『楽田村史』には、津田応助氏によって「物狂峠西南部山脈頂に無数存する円墳」として紹介されている（註3）。これらの古墳は「南面して二、三十ヶ所も存していた」と記されており、文脈から類推するに戦後の開墾以前に訪

れた時の状況を示しているものと考えられる。その後、1951（昭和26）年に中山英司氏が率いる南山大学によって蓮池古墳の発掘調査と周辺の古墳の分布調査が行われた。しかし調査は未報告に終わり、後年になって「中山英司と愛知の遺跡」において、残されたわずかな記録が報告された



図1 蓮池古墳群位置図

（国土地理院発行電子地形図1/25000に加筆。
（愛知県教育委員会、1994、『愛知県遺跡地図（I）尾張地区』を参考。）



写真1 資料展示風景

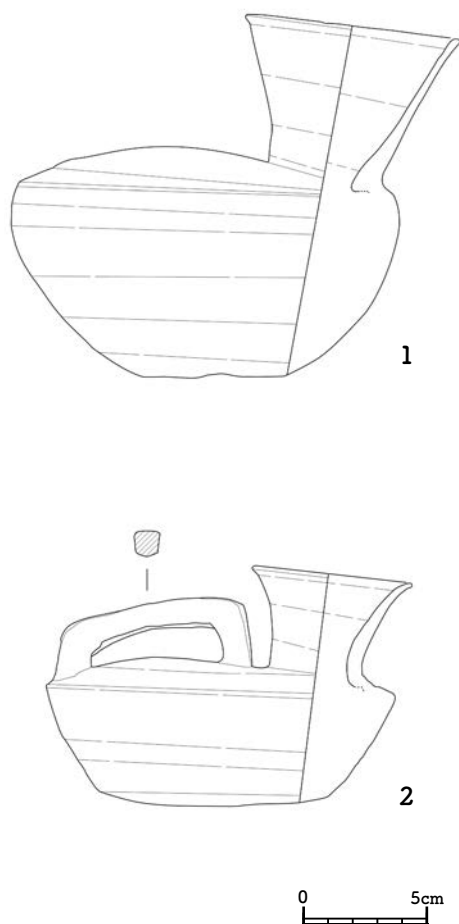


図2 蓮池古墳群 新規発見資料
実測図 (1/3)

のみである(註4)。それによると、南山大学の分布調査では丘陵の南東斜面に15基の古墳が確認されている。うち1基から火葬人骨の入った石製蔵骨器や須恵器・土師器などが発見されたことを受け、発掘調査を行ったようである。その直後に檜崎彰一氏が現地踏査をし、4基の古墳の存在を報告、うち蓮池4号墳が調査が行われた古墳としているが(註5)、1983(昭和58)年発行の『犬山市史』では蓮池2号墳の発掘調査が行われた古墳とされており(註6)、以後それが踏襲されている。

なお、調査された蓮池2号墳が、南山大学作成の古墳分布図(註7)にある2号墳と同一かは不明である。

3. 蓮池古墳群出土とされる

新規資料について

今回、現地での聞き取り調査によつて、蓮池古墳群より出土したとされる個人蔵の須恵器平瓶2点を確認することができた。どちらの資料も詳細な出土地点は不明だが蓮池地区の開墾の際に発見され、所蔵していたものとのことである。なお、この須恵器2点は今回の調査を契機

に、青塚古墳ガイダンス施設で展示することとなり(写真1)、企画展終了後には資料を犬山市へ寄贈していただいた。

以下に資料の詳細を提示する。

資料1

須恵器 平瓶 (図2-1)

口径8.5cm、器高14.3cm、胴部最大径15.4cmで、ほぼ完形の状態である。頸部が大きく直線的に開き、口縁端部に平坦面がつく。胴部は扁平で肩部に緩い稜線をもつて屈曲し、上部外面には粘土板を接

合したことによる凸凹が明瞭に残る。平底で底部から胴部1/3程度まで回転ヘラケズリを施す。底部にはヘラ記号がある。こうした特徴からの資料の時期をⅢ期-4小期・Ⅰ-41号窯式期(註8)の前後を想定したい。Ⅰ-41号窯式期は実年代では7世紀第4四半期に位置付けられる。

資料2

須恵器 把手付平瓶 (図2-2)

口径6.2cm、器高9.5cm、胴部最大径13.7cmで、口縁部が一部欠損するが、ほぼ完形の状態で

ある。口縁部が大きく外反して開き、頸部の接合部分には指で押さえたような凹みが外面に残る。胴部は扁平で肩部に明瞭な稜線をもち屈曲する。丁寧な面取りされた把手がつく。これらの特徴からこの資料の時期をⅢ期―5小期・C―2号窯式期の前後を想定したい。C―2号窯式期は実年代では8世紀第1四半期に位置付けられる。なおこの資料は、南山大学の調査時に、古墳周辺から出土した須恵器として撮影された写真が残っている。

これまでに知られている蓮池古墳群の出土遺物としては、南山大学調査による蓮池2号墳（蓮池古墳）出

土遺物がある（写真2）。調査時の出土遺物は須恵器平瓶・長頸瓶、土師器2個体が出土したとされているが、現在は須恵器長頸瓶1点と土師器甕1点が、南山大学人類学博物館に所蔵されるのみである。長頸瓶は8世紀前葉のC―2号窯式期、甕は8世紀前半頃のものとされる（註9）。今回、新たに確認された（資料2）も同じく8世紀前半であり、当古墳群が少なくとも8世紀前半までは、追葬を前提に墓として利用されていたと言える。また7世紀後半の（資料1）も確認できたことから、墓としての利用が複数時期にわたっていたと想定される。



写真2 蓮池2号墳出土遺物
（南山大学人類学博物館蔵）

4. おわりに

本稿では、確実な出土遺物ではないが蓮池古墳群出土とされる資料を取り上げ検討した。先述した通り、当古墳群は古墳時代から律令期へと移行する時代の葬制を考える上で重要な遺跡であると言える。当古墳群に関する多くの情報は失われており、これ以上検討することは難しいが、周辺の遺跡の状況や出土遺物などを踏まえて、改めて検討したい。

今回の調査では、ニワ里ねつとの服部哲也氏が、偶然地元住民の方に声をかけたことから、新たな資料2点の発見につながった。犬山市内には当古墳群と同様に戦後の開墾や開発によって滅失したとされる遺跡が数多くあり、当時発見された遺物が個人で所蔵され、公に報告されていないケースも大いにありうるであろう。こうした資料は不確かなものではあるが、情報を補填する重要な資料となり得る。資料が散逸してしまう前に、犬山市域全体でも、こうした聞き取り調査も含めた悉皆的な分布調査が必要であると感じる。

最後に本稿の執筆にあたり、左記

の皆様にご協力・ご助言を賜りました。記して感謝申し上げます。（敬称略、五〇音順）²

服部哲也・南山大学人類学博物館・山中二江・山田修身

註1 安東義弘・松原隆治・伊藤秋男、

2007、「中山英司と愛知の遺跡」『伊藤

秋男先生古希記念考古学論文集』

註2 犬山市教育委員会・犬山市史編さん

委員会、1983、『犬山市史』資料編3

考古 古代・中世

註3 楽田村史編纂委員会、1967、『楽

田村史』

註4 註1に同じ

註5 愛知県教育委員会、1956、『遺跡

分布調査報告―尾張編―』

註6 註2に同じ

註7 本誌掲載の服部・近藤氏による論考

内、図2参照。

註8 須恵器の編年観は、愛知県史編さん委

員会編、2010、『愛知県史資料編4（考

古4）飛鳥―平安』に依拠した。

註9 愛知県史編さん委員会編、2010、

『愛知県史資料編4（考古4）飛鳥―平安』

NPO 法人
にわ
古代邇波の里・
文化遺産ネットワーク
(ニワ里ねっと)

木之下城伝承館・堀部邸
(NPO 事務所)

〒484-0084
犬山市大字犬山字南古券 272
TEL:0568-90-3744
FAX:0568-90-3743

青塚古墳史跡公園

〒484-0945
犬山市字青塚 22-3
TEL:0568-68-2272

HP 《ニワ里ねっと》
<http://niwasato.net/home>
《木之下城伝承館・堀部邸》
<http://horibetei.com>

研究紀要 第4号

niwa

邇波



《編集・発行》

NPO 法人古代邇波の里・文化
遺産ネットワーク (ニワ里ねっと)

《写真》

中野 耕司、ニワ里ねっと事務局

《発行日》

平成29年5月21日

ニワ里ねっと会員募集

ニワ里ねっとでは、会員・賛助会員を募集しています。
私たちと一緒に文化遺産を活かしたまちづくりに参加
しませんか？

会 費

正 会 員 一口 3,000 円
賛助会員 一口 3,000 円 (個人・団体とも)

会員特典

1. 会員証の発行。会員証の「参加印」を集めると、記念品を贈呈。
2. 会報「さとの四季だより」を年6回お届け。
3. 各種イベントに会員料金で参加。

申込方法

- 方法1. 青塚古墳ガイダンス施設の窓口にて受付。
方法2. 下記郵便振替口座へお振込み。
通信欄に、「年会費」とご記入ください。新会員様は、「新規正会員」ま
たは、「新規賛助会員」と明記の上、住所・氏名等を必ずご記入お願い
いたします。(※申し訳ありませんが、手数料はご負担願います。)

郵便振替口座

口座番号 00850-9-198552
口座名称(漢字) 特定非営利活動法人 古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
口座名称(カナ) トクヒ コダイニワノサト プンカイサンネットワーク

上記の郵便振替口座にて「寄付金」も受付けております。
ニワ里ねっとの活動の応援、よろしくお願いいたします。



あなたも
ニワ里ねっとに
参加しませんか？

個性豊かな
メンバー活躍中！

